広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	漱石、嫁をもらひけり：俳句に見る新婚生活
Author(s)	片桐，まい
Citation	西日本文化 , 486 : 44 - 47
Issue Date	2018-04
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049803
Right	
Relation	

漱石、嫁をもらひけり

―俳句に見る新婚生活―

片桐まい

本稿では、およそ一〇〇〇句にのぼる熊本時代の俳句から数句を選び、漱石の熊本時代の一面をご紹介する。

俳人　漱石

明治三十八年（一九〇五）に処女小説「吾輩は猫である」を発表した漱石は、その後の『坊っちゃん』、『三四郎』、『こころ』など、多くの作品が愛され続けており、近代文学を代表する作家として国語教科書にも作品が採用されている。

しかし、熊本にやってきた二十九歳の漱石は、小説を書く前の、千円札の顔をしていない、若き日の漱石である。熊本赴任の前年、漱石が愛媛県尋常中学校へ赴任していたことは、『坊っちゃん』によって有名である。赴任先の松山は、東京大学予備門予科の同級生であった俳人・正岡子規の地元である。身近で、自由に創作する親友子規の影響を受け、漱石もたいへん熱心に句作に励んだ。結果的に漱石は、松山・熊本の五年間に、生涯に詠む俳句の約七割を作ってしまった。熊本に移ってからも、漱石は、俳句を作っては子規（前年上京）へと送り、添削を乞う。新聞『日本』の記者であった子規は、周囲の人々の俳句を次々と新聞に載せ、明治の俳句熱を盛り上げていた。

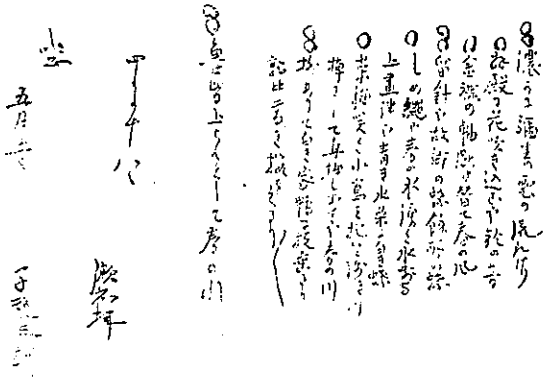
漱石記念年とくまもと

平成二十八年（二〇一六）および二十九年（二〇一七）は、それぞれ夏目漱石の没後一〇〇年、生誕一五〇年の記念年であった。この間、漱石に関わりをもつ自治体や企業その他によって、数多くの記念企画・イベント・出版等が行われた。一〇〇年前に亡くなった、個人が現在に及ぼす影響の大きさ、夏目漱石の存在感というものを、改めて実感する。

くまもと文学・歴史館でも、平成二十八年秋に漱石を特集した企画展「来熊一二〇年　漱石と熊本　―秋はふみ吾に天下の志―」を開催した（注1）。先に述べた（没後一〇〇年）の記念ではなく、（熊本赴任一二〇周年）の記念企画とした点は、熊本の特徴、工夫である。現在において存在感を失わない文豪・夏目漱石が、熊本に暮らしていたという事実は、今もって熊本の誇りである。なお、熊本地震を経験したばかりの熊本で、余震も頻発するなか、貴重な収蔵資料の展示をご承諾いただいた松山市立子規記念博物館、みやこ町歴史民俗博物館ほか関係者のみなさま、被災し閉館を余儀なくされているにも関わらず、展示にご協力いただいた熊本大学五高記念館、そして熊本内外から会場にお越しくださった来館者の方々に、あらためて感謝申し上げる。

明治二十九年（一八九六）四月から明治三十三年（一九〇〇）七月まで、漱石こと夏目金之助は第五高等学校の英語教師として熊本に赴任、熊本市に起居した。慶応三年（一八六七）に生まれ、翌年満一歳で明治改元を迎えた漱石は、明治の年号と満年齢が一致している。漱石が熊本で過ごしたのは、満二十九歳から三十三歳までの四年三ヵ月のことであった。当館の展示では、全体を「一、漱石と俳句」「二、漱石の見た熊本」「三、漱石のくらし」の三部に分けて構成したが、これらはそれぞれ熊本の漱石を語るキーワード「俳句」、「教師」、「新婚」を言い換えたものである。

ところで「文人俳句」という言葉がある。文筆にたずさわる〈文人〉が、余技として作る俳句のことである。近代の文人たちの中には、小説や短歌、戯曲など、それぞれが専門とするジャンルにこだわらず句作を愉しんだ人も多く（注2）、漱石の俳句もこの「文人俳句」に数えられることがある。たしかに後年、小説を書き始めたあとの漱石にとって、俳句は文章の合間の「余技」であったかもしれない。しかし、熊本時代の漱石にとっては、俳句はほとんど唯一の文学活動だったのである。



子規へ送りたる句稿　明治30年／くまもと文学・歴史館所蔵

漱石俳句に見る鏡子

さて、ここから漱石の俳句を鑑賞していく。一〇〇〇句に近い作品の中でも、せっかくなので熊本らしく、「新婚」に着目してみたい。

赴任の約二ヵ月後、漱石は、前年婚約が成立していた中根キヨ（通称鏡子、満十八歳）を熊本に迎えた。熊本で過ごした足かけ五年の月日は、漱石新婚の五年間であるとも言える。二人の手さぐりの結婚生活が熊本で始まった。

漱石の作った熊本時代の俳句のうち、鏡子の姿が見え隠れする句は全部で八句ある（注3）。九九六句のうちの八句（単純計算で一％未満）が多いのか少ないのかという点に関しては、簡単に判断することはできない。しかし、漱石には確実に「妻」（「嫁」「内君」）へのまなざしがあったことが分かる。これらのいくつかについて、適宜引用しながら鑑賞してみよう。

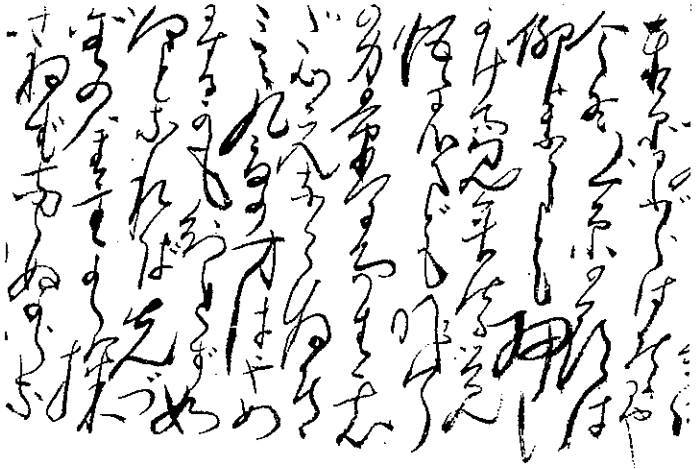
鏡子が初めて登場した句は次の句である。

797　衣更へて京より嫁を貰ひけり

季語は「更衣（ころもがえ）」（夏）。漱石の結婚は明治二十九年六月九日、ジューンブライドであった。

明治二十八年十一月十三日（見合いのおよそ一ヵ月前）の正岡子規宛書簡に、漱石は「三々九度の方はやめにするかも知れず」（注4）と書き、結婚に対する悩みをのぞかせていた。その後、結婚直前の六月六日付書簡には、「妻呼迎の件色々御心配被下ありがたく存候」（注5）とある。結婚について「色々御心配」をかけていた子規に対し、無事の結婚を報告したのがこの俳句であった。そのため、結婚の事実をそのまま直接に詠んでおり、

↓



子規宛書簡　明治28年11月13日／くまもと文学・歴史館所蔵
矢印の箇所に「三々九度の方はやめにするかも知れず」の文字が見える

鏡子がどのような嫁で、何をしているのか、など、鏡子の姿が読み取れるものではない。

内君の病を看護して　一句

879　枕辺や星別れんとする晨（あした）

季語は「星別れ（星の別れ）」、七夕の翌朝（未明）のことである。ある晩、妻が体調を崩した。その夜は七夕だったが、すでに織姫と彦星はつかの間の再会を果たし、別れの時間を迎えている。そのような時間になっても自分は妻に付き添っていて、枕辺に夜を明かしてしまった。新婚一ヵ月の妻に対する漱石の優しさがうかがえる句である。

同様の句に、

1408　病妻の閨（ねや）に灯ともし暮るゝ秋

というものがある。漱石の俳句によって鏡子の姿を探ろうとすると、病弱、虚弱といった印象を受ける。実際、貴族院書記官長中根重一の長女として東京に生まれ、東京で育った鏡子にとって、地方熊本へ下って漱石に嫁いだことは、相当のストレスであったとも言われる。新婚早々、漱石に、「俺は学者で勉強しなければならないのだから、お前なんかにかまつては居られない。それは承知してゐて貰ひたい」（注6）と宣告されたエピソードなども思い出され、同情心も覚えるが、同時に〈病気の妻〉は漱石にとって恰好の俳材であったとも言える。病気の鏡子は詩的であった。

妻を遺して独り肥後に下る

1280　月に行く漱石妻を忘れたり

明治三十年（一八九七）夏、漱石夫妻は漱石の実父が死去したことを知り帰京した。そのとき鏡子は妊娠していたが、気づかないまま汽車に長時間揺られたため、東京で流産してしまった。鏡子はそのまま東京の家族のもとで静養することになり、漱石は学校があるため熊本へと戻る。そのときの句である。この俳句について、私はこれまであまり腑に落ちる解説に巡り会わずにきた。ここでひとつ、持論を述べておこうと思う。

この句の詞書にある「肥後に下る」は、まぎれもなく漱石が熊本へ向かうことを指している。それが、俳句で「月に行く」と表現されているため、「熊本を月にたとえた」など、熊本人にとってうれしい、ロマンティックな解釈を付けてくださる方もあるようだ。しかし、果たしてそれは妥当だろうか。またなぜ漱石は、「妻を忘れ」てしまうのだろうか。

漱石が新橋を発って熊本へと向かったのは、明治三十年九月八日であった。旧暦であれば八月十二日。そして二日後、旧暦八月十四日に熊本に到着する。つまり、この旅は中秋のころの旅であった。中秋、十五夜、月への旅、と言えば、『竹取物語』が下敷きになっているとみて差し支えあるまい。むしろそう考えてこそ、「忘れたり」の言葉も生きてくる。これは、かぐや姫が天の羽衣をまとったことで、地上の出来事を忘れてしまうエピソードを踏まえているのである。十五夜のころ、かぐや姫は養父母のことを忘れて月に行く。一方、漱石は、妻のことを忘れて肥後に下る。中秋のころ、月を追って西へ向かった汽車の旅を、かぐや姫の昇天になぞらえたのがこの俳句である。

ちなみにこれが中秋の名月に関わる句であることは、ともに子規宛に送られた他の俳句を見ても明白である。次にいくつか引用しておく。

1272　明月に今年も旅で逢ひ申す

1273　真夜中は淋しからうに御月様

1278　これ見よと云はぬ許りに月が出る

こうしてかぐや姫を念頭に置きながら、「妻を忘れた」などと記した漱石であったが、もちろん鏡子を忘れたはずはなかった。流産した鏡子は失意の底にあって、心身ともに弱りきっていたであろうが、漱石も変わらぬ気持ちであったと推測される。このころ（明治三十年秋）親友正岡子規が、流産にちなむ俳句を残している（注7）。

流産

水の月物かたまらで流れけり

手のものを取落しけり水の月

東京で漱石は子規に会っていたし、二人の間には現在の私たちに伝わらぬやり取りもあっただろう。漱石自身は句を作らずとも、親友子規が代弁している。子規の句は漱石の無念をうつしたものであろう。

翌年、初夏。とうとう夫妻に第一子が誕生する。

1772　安々と海鼠（なまこ）の如き子を生めり

初句「安々と」に安心させられる。安産だ。漱石によって筆と名付けられた長女である。こうして熊本時代の俳句から漱石の家庭をのぞいてみると、漱石の熊本でのくらしが浮かび上がってくる。

終わりに

以上、俳句によって熊本における漱石の姿を簡単にたどってみた。紹介し得た俳句はごくわずかだが、俳句によって漱石やその暮らしぶりが見えてくることをお分かりいただけたと思う。自己とその生活を客観的にとらえ、俳句として残す。熊本時代に熱中したこの作業の繰り返しが、のちの創作にも生かされていくことになる。

ついでながら、漱石記念年に始まった事業のひとつとして、岩波書店から『定本漱石全集』の刊行が続けられている。これまで、漱石全集の最新版は一九九三年～九六年版の第二刷（二〇〇二～〇四）であったが、岩波書店公式ホームページによれば（注8）、新版には新たに追加される作品や、自筆原稿により本文表記を改める作品などがあるという。すでに、熊本を舞台とする「草枕」、「二百十日」を収録した第三巻は刊行済みであるが、待たれるのは「俳句・詩歌」を収めた第十七巻である。旧全集において、熊本時代の漱石が作った俳句は九九六句であった。これが新版で一〇〇〇句を超すか否か。熊本の漱石がしのばれる俳句は増えるのか。鏡子は筆子は現れるか。密かに楽しみとするところである。

注1　平成二十八年十月六日から十一月十四日、まで開催。なお、展示タイトル「秋はふみ吾に天下の志」も漱石が熊本で詠んだ俳句であり、五高の図書館を素材にしている。

注2　『現代俳句大事典』（三省堂　平成十七年）には漱石のほか、尾崎紅葉、幸田露伴、永井荷風、芥川龍之介らの名前が挙げられる。ここでは「嫁」、「内君」などの言葉が明記されるものに限った。以下に八句すべてを列記しておく。

句頭の番号および引用は『漱石全集』（岩波書店　平成八年）による。傍線は筆者。

797　衣更へて京より嫁を貰ひけり

内君の病を看護して　一句

879　枕辺や星別れんとする晨

948　生憎や嫁瓶を破る秋の暮

956　菊活けて内君転た得意なり

991　行年を妻炊ぎけり粟の飯

妻を遣して独り肥後に下る

1280　月に行く漱石妻を忘れたり

1294　嫁し去つてなれぬ砧に急がしき

1408　病妻の閨に灯ともし暮るゝ秋

注4　くまもと文学・歴史館所蔵。

注5　松山市立子規記念博物館所蔵。右資料と併せて平成二十八年の漱石展にて展示した。

注6　夏目鏡子述、松岡譲筆録『漱石の思ひ出』第十四刷改版（岩波書店　平成十五年）

注7　『子規全集 第三巻 俳句三』（講談社　昭和五十二年）

注8　岩波書店ホームページ https://www.iwanami.co.jp/news/n17359.html（2018/02/21 最終閲覧）

かたぎり　まい・くまもと文学・歴史館
学芸員